

委員 調査を終えて

水嶋 英治 委員長

博物館は社会から負託された歴史資料や作品・標本の類を展示・収蔵しています。専門家集団である博物館は資料やコレクションを守るプロでなければなりません。常日頃から博物館のリスクマネジメントを考え、注意を払い、そして実践的に訓練を積み重ねていきたいものです。本書を通じて関係者全員で議論し、自分たちのマニュアルを作成してください。地域の実情に応じた対応策を検討していただければ幸いです。

青木 睦 委員

紙資料の被災救助に携わって 18 年、これまでの災害から学んだことは、しっかりとした日常の保存管理こそ、優れた危機管理、万全の災害対策であるということ。災害に見舞われたときには、支援を得る心の準備と助け合いネットワークが必要であるということ。所蔵資料配架リストは自館だけでなく、危機分散のためにも他館でも保管してもらうこと。MLA=博物館・図書館・アーカイブズの文化資源を未来に遺す重責が課せられているという自覚。このガイドブック活用者の「不断の努力」は必ずや報われる。

井上 洋一 委員

私たちは地震や風水害といった自然災害を避けることはできません。しかし、起こることを前提にその対応策を練ることはできるはずです。「備えあれば憂いなし」、これこそ被害を最少に食い止める方策でしょう。そして事後の処理を如何に行うべきか。これがなかなかの難問です。このガイドブックにはその対処法が盛り込まれています。もちろん、これはあくまでひとつの例に過ぎませんが、このガイドブックが少しでも博物館におけるリスクマネジメントに役立つことを祈っております。

川端 信正 委員

このガイドブックを手元に置くだけで危機管理が出来るものと思っははいけません。ガイドブックは危機管理の基本型を示したものです。本書をヒントに、あなたの博物館にあったマニュアルを作成し管理運営にあたる人たちがその情報を共有しなければなりません。マニュアルは非常時に急遽開くのではなく基本部分は担当者の頭の中にインプットされていることが必要です。本書はそんな利用をしていただけることを望みます。

高田 浩二 委員

そもそも博物館は、貴重な学術資料を守るという役目があるため、他の施設より強固にできています。その機能は、様々な災害時に、地域の文化や自然、環境、そして人命をも守ることにつながります。加えて博物館職員の危機管理体制が備われれば、最も頼もしい存在になることでしょう。

田村 和彦 委員

博物館や類似施設におけるリスクマネジメントの範囲や考え方を3年間の調査で示せたと思います。多少、一般論として書かれているところもあり、施設の規模や種類によっては、該当しない部分、あてはまらない部分なども多いかと思います。博物館等を運営する立場の方々が、これを読んでいただき、それぞれの施設の状況にあわせて、少しでも多くの施設で、リスクマネジメントについて考えるきっかけ、ヒントになればと思います。

西形 國夫 委員

災害が自分の身にふりかかるかもしれないとは誰も思いたくないものです。寺田寅彦は、「文明が進むほど天災による損害の程度も累進する傾向があるという事実を十分に自覚して、平生からそれに対する防御策を講じなければならないはずであるのに、それがいっこうにできていないのはどういうわけであるか。そのおもなる原因は、そういう天災がきわめてまれにしか起こらないで、ちょうど人間が前車の^{てんぷく}顛覆を忘れたころにそろそろ後車を引き出すようになるからであろう。」(一部略)と書いています。災害は時と場所を選びません。自分が置かれた環境をよく知って、もしものときに備えてその心構えができるのは、みなさん方ご自身しかいないことを忘れないでください。

根本 芳雄 委員

危機管理は、事案が発生したとき在館していた人とその人たちの能力だけで対処します。だから、このガイドブックを参考に準備が必要です。

「自分の施設、自分だったら、どうするか」考えながら、自分の施設のマニュアルを作り上げることが、大切です。すべてのリスクを完全にカバーできません。自分の施設で一番心配なリスクをひとつ、マニュアルを作り、訓練までやってみてください。あとのリスクは応用問題になります。

東出 学信 委員

公共の施設等に対して、リスクマネジメントは非常に高いレベルで求められているということを組織全体で再認識することが重要であると思います。万一の際に不十分な対応しか出来なかった場合、どのような状況になってしまうのかを想像し、不足している部分を見直す機会を意識的に作り出すことが大切であり、その際に今回のガイドブックがお役に立つのではないかと思います。非常時の対応力がその施設の価値に繋がるものと思います。

山本 哲也 委員

博物館は単にモノを守るだけでなく、人の心を守る施設と考えています。このガイドブック利用者には、「守る」というその心を守ることの大切さに気付いて頂けたら幸いです。それが作成に携わった者としての願いです。そして博物館は、モノと同時に人々の心を守っているということをもっと発信していいと思っています。それこそが、本当の「守る」につながると思いますし、このガイドブックの意義が向上すると考えるところです。